

これは仏教史上画期的なことである。本年5月に発刊した『仏教哲学百科事典』は、ロシア科学アカデミー哲学研究所が編纂したもので、哲学思想としての仏教に関する項目を網羅したロシア初の本格的な百科事典である。

本事典の日本仏教関連項目については、ロシア側の要請により、東洋哲学研究所の研究員が、「日蓮」「立正安国論」「創価学会」「牧口常三郎」「戸田城聖」「池田大作」など16項目の執筆を担当している。このようにロシア国外の研究者の執筆協力を得て事典を出版するのは初めての試みである。と、グセイノフ哲学研究所所長は語っている。また、ロシアの事典類で「牧口常三郎」「戸田城聖」二代会長の項目が掲載されたのも初めてのことである。

この百科事典では、「日蓮」に関する記述は、従来のロシアの研究者による解釈と抜本的に異なる。これまでは日蓮といえば、非寛容で攻撃的なカリスマ僧という評価がロシアの研究者の間で一般的であり、学術書にも日蓮が他宗僧の抹殺を呼

ロシアで『仏教哲学百科事典』発刊

江口 満

びかけていたとまで書かれていた。

ロシアは、宗教に否定的であったソ連時代を経た独特の思想変遷を経験してきている。私が90年代後半から21世紀初頭にかけてロシアで学位論文を執筆していた時、中間審査で仏教思想に立脚した人間主義について書いた部分が議論を呼んだ。何が議論的となったのか？ 社会主義的ヒューマニズムを標榜するソ連社会を生きてきた人々にとっては、ヒューマニズムは無神論的なものであり、彼らにとって宗教とヒューマニズムは結びつかなかったのである。結局、その議論は「キリスト教的ヒューマニズム」という概念もあるなら、「仏教的ヒューマニズム」もあり得るという結論に達した。

宗教や思想は、それぞれの文化、社会の土台であり、異なる文化圏の相互理解は容易ではない。しかし、だからこそ異文化間の地道な共同作業で意外な発見や新たな理解の絆が生まれた時の喜びはひとしおである。

(えぐち みつる／東洋哲学研究所委嘱研究員)